

タイトル:平成 23(2011)年度 研究セミナー

日程:平成 23 年 12 月 19 日(月)～21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「レバノン人が関係性にこだわる時 ― 予備的検討」

池田 昭光(日本学術振興会特別研究員)

セミナーを終えて一ヶ月あまりが過ぎ、すでに忘れてしまったことと、いまでもよく覚えていることがある。前者が重要でないということでは決してないのだが、忘れてしまったことは書けないので、覚えていることのうち、他の人にも役にたちそうなことを記しておきたい。

それは、一方で感じられる学問分野間の溝の深さと、にもかかわらず他方で感じられる、複数の研究者が同じ場にいることの良さ、である。それぞれに専門が異なると、前提とされる発想や、考えずに済ませていることがお互いによくみえず、率直に言って、どうしてよいかわからなかった。よくみえてないままに意見をぶつけても、のれんに腕押しといった感があり、疲れる。

けれども、ほんの少しは、たしかに「かみあった」と思えるときがあった。「かみあう」の内容は、さまざまだから、限定はしない。それで、それがどういう条件でやってくるのか、振りかえって考えてみると、おそらく、自分も相手も、みずからが身につけている約束事を、いったん捨てているときだろうと思う。分野同士の溝を感じながら意見を述べたり質問をすると、意見や質問自体が窮屈になってしまう。しかし、その溝が存在しないかのように、意見などがスッと交わされるときがある。そんなときは、「自分たちは同じ土俵にいる」という手応えを感じる。何か納得できるように思うのである。

それでただちに何かがある、というわけではない。しかし、ひょっとしたら、全体としてすすむべき方向、考えるべき事柄といった、土台の部分が強化されたのではないか、と思える。研究が細分化されていることの違和感のなかで、不意に訪れる「共通」の感覚。そこにはひょっとしたら、来るべき新しい問題、新しい議論が眠っているのかもしれない。セミナーを終えて、自分は自分の分野でやるべきことをおこないつつ、この共通の根っこにも、これから目を凝らしていこうと思った次第である。